

令和8年度 産業・情報技術等指導者養成事業 福祉(H-1)研修

2026.8.25 Tue.

【介護福祉士を取り巻く状況と今後】

厚生労働省社会・援護局の午頭潤子様をお招きして、「介護福祉士を取り巻く状況と今後」についてご講演いただきました。

福祉人材確保専門委員会における議論および社会保障審議会福祉部会報告書を踏まえた社会福祉法等の一部を改正する法律に基づき、介護人材の確保と育成に関する今後の施策について詳しくお話しいただきました。将来的な人口減少や高齢化の加速を見据え、都道府県による人材確保プラットフォームの構築など地域共生社会の実現に向けた包括的な支援体制の強化が進められていることについて説明がありました。また、介護福祉士国家試験の見直しに関連して、令和7年度（第38回試験）から導入された「パート合格制度」の詳細や運営方法についても説明がありました。さらに、身寄りのない高齢者への日常生活支援や、災害派遣福祉チーム（DWAT）の法制化など、今後さらに多様化するニーズに対応するための取り組みについても理解を深めることができました。

今回の内容を通して、今後の人口減少や高齢化に対応しながら、質の高い介護サービスを継続して提供していくために、制度や支援体制の整備が重要であることを改めて認識しました。介護を取り巻く制度改正の全体像を理解する上で大変有意義な機会となりました。

【介護実習等における DX 化】

富士フイルムシステムサービス株式会社より長尾舞様にお越しいただき、FUJIFILM による介護実習支援システムについて、システムの特徴や導入による効果、実際の活用方法についてご説明いただきました。本システムは、セキュリティへの配慮が求められる介護現場においても活用できる仕組みとなっており、個人情報を含む実習記録の紛失防止にもつながることなど、安全性と利便性を両立したシステムであることのご紹介がありました。

また、教員にとっては実習先への巡回時に記録の確認に費やしていた時間を減らし、生徒の実際の様子を確認したり、1人ひとりの経験や力量を踏まえた実習指導につながる大きな利点として示されました。

実際にシステムを導入している学校の事例からは、教員と実習指導者との情報共有がスムーズになったことに加え、生徒自身が記録に費やす時間だけでなく、実習内容について考える時間を確保できるようになったことが紹介されました。また、目標や実施状況が三者にとって明確になり、共通理解のもとで実習を進められるなど、介護実習における学習の質の向上にもつながっていることが分かりました。

実際に生徒・教員・実習指導者それぞれの立場からシステムを操作するデモンストレーションを通して、単に実習日誌をデジタル化するだけではなく、三者がリアルタイムで生徒の学びや課題を共有し、必要な支援へ速やかにつながるための仕組みであることを実感する機会となりました。



【高校における介護教育と介護実践を考える】

十文字学園女子大学准教授の二瓶さやか先生をお招きし、「高校における介護教育と介護実践を考える」と題して、これからの時代に求められる実践力についてご講演いただきました。

「学校で学ぶ介護」と「現場の介護」に9割の学生が違いを感じている現状を踏まえ、介護教育において求められる実践力とは何かについて、具体的にお話いただきました。実践力とは、学んだ知識や技術を状況に応じて活用する能力であり、現場で生じる課題を教育へと還元していくことが重要であるとの説明がありました。介護に必要な実践力（資質・能力）は、学校内での教育のみで身に付くものではなく、実際の経験と振り返りを通して、それぞれの学びが統合されることで育まれていくことを改めて理解することができました。

また、実践力の育成に向けた実習教育の在り方についてもお話いただきました。「問い」の質が実践力の形成を支えることから、実習の振り返り（事後学習）では、単に正解を与えるのではなく、学習者自身が考えるための「問い」を設計することが重要であるとのことでした。実習での経験を言語化・構造化し、他者との対話を通して再構築することが、実践力の育成につながることを学びました。講演では、事例を用いた演習や大学における実践事例の紹介もあり、具体的なイメージを持ちながら理解を深めることができました。

最後に、これからの時代に求められる介護実践について、外国人介護人材との協働やテクノロジーの活用を中心にお話いただきました。テクノロジーの進化に伴い、技術を使いこなす力に加えて、その活用目的を理解し、人とつながる力がこれからの介護には求められるとのことでした。一方で、人を理解する力、状況を判断する力、他者と協働する力といった「実践力」の重要性は、これからも変わらないことを学びました。

今回の講演を通して、高校における介護教育は、未来の介護実践を支える重要な教育であることを改めて認識する貴重な機会となりました。

【介護過程の授業展開と介護実習との連携】

介護過程について、「生徒が介護過程を実践できる力を身につけるための教育方法の糸口をつかむこと」をねらいとして、指導方法、介護過程シートの活用、AIの活用、実習施設との連携など、さまざまな視点からご講義いただきました。介護過程には一つの確実な正解があるわけではないからこそ、利用者の生活や思いを捉え、根拠をもって考え、実践する力をどのように育成していくかが重要であるとのことがありました。

介護計画の作成については、分析を踏まえた個別性と実行の可能性のある内容とし、本人の意思や思いを反映させること、本人が選択・納得した上で取り組める本人主体の計画とすること、自立支援につながる内容とすることなど、その作成のポイントが示されました。また、チームで共通して実践できるよう具体的な計画とすることに加え、客観的に評価できる指標や満足度などの気持ちの変化についての指標をあらかじめ準備しておくことの重要性についてもお話がありました。

グループでの意見交換では、「介護過程の授業や介護実習におけるAI活用について」「介護過程の実践力を育成するための実習施設との連携について」の二つのテーマをもとに検討を行いました。

正解が一つではない介護過程をどのように生徒へ指導していくかという課題に対して、科目間の連携や実習施設との協働に加え、ICTやAIなどの新たな手段も適切に取り入れながら、生徒自身が根拠をもって考え、実践できる力を育成していくことの重要性について考える貴重な機会となりました。

